

第4回まちづくり勉強会（講師：飯田峰子 氏） 開催結果

1 開催日時（会場）

令和8年9月29日（火）午後7時から午後9時まで（SASAYA CAFE）

2 講師

- ・ 一般社団法人横浜まちクリエイティブ代表理事 飯田 峰子 氏
- ・ 秦野市中心市街地活性化タウンマネージャー 伊藤 大海 氏

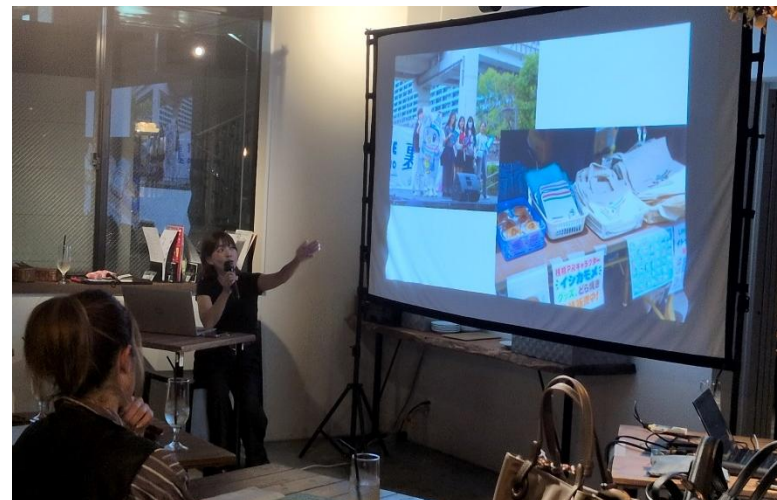
3 参加者数

26名

4 目的

- (1) 飯田氏の取り組んできた横浜市石川町のまちづくりの事例から、勉強会参加者が秦野市での挑戦したいことの実現方法や今後のまちづくりの視点を学ぶこと。
- (2) スモールビジネス（自分の価値観で営む小規模な事業）や地域課題解決に向けた取り組みについて学ぶことで、地域や関係者の理解を深め、まちづくりへの主体的な関心や参画意識を高めること。

5 開催状況



6 内容

(1) 横浜市石川町での地域再生の取り組み

・石川町の地域課題

石川町は、元町や中華街への玄関口として知られていたが、2004年のみなとみらい線開業により「元町・中華街駅」が整備され、来街者の流れが変化してしまった。

遠方から訪れる観光客が石川町駅を利用する機会が減少し、「中華街の玄関口」という認識が次第に薄れていった。

また、昔ながらの住宅と商店が混在する下町的な商店街であり、高齢化による担い手不足や、空き家・空き店舗の増加といった課題も抱えていた。

・「何もしなくても人が来るまち」からの転換

以前は立地の良さから、元町や中華街への来訪者が自然に石川町にも流れていたため、積極的なPRやイベント開催を行ってこなかった。

しかし、みなとみらい線開業を契機に、周辺地域が新たな魅力づくりに取り組む中で、「このままでは石川町の存在感が失われる」という危機感が地域内に広がった。

(2) 危機を契機に生まれた地域連携

・地域のつながりを生んだ交流の場

石川町を流れる中村川の栈橋整備をきっかけに、市民団体による勉強会を開催したところ、商店街関係者、町内会、住民など、立場の異なる人が地域について話し合う場が生まれた。このような交流の積み重ねが、後のまちづくり活動の基盤となった。

・地域イベント「裏フェス」の開催

地域の飲食店経営者が「石川町も何か取り組まなければ」という思いから自主的に開始。交流が生まれたことでできた飲食店のつながりを活かし、ワンコインで各店舗自慢の料理を楽しめるイベントとしてスタートした。

初回開催で見えた可能性と課題成果想定を超える来場者を集め、地域内外から「石川町には人を呼ぶ力がある」と実感する機会となったが、一方でごみ処理、騒音、トイレ、警備などの問題が発生し、運営側も大きな負担を抱え、「成功したが、このままでは継続できない」という状況となった。

・イベントが地域の関係性を変える契機に

裏フェス継続のため、町内会や地域住民へ改めて説明し、課題や不満を一つずつ聞き取った結果、地域側にも「石川町を何とかしたい」という思いがあることが分かった。その結果、イベント実行委員が商店街へ参画し、商店街及び町内会が協力して、祭りの運営や地域活動を支える関係へ発展していった。

(3) 地域課題を事業として解決する仕組みづくり

・まちづくり会社による地域事業の展開

商店街単独では、商店街ごとの規模や財政状況の違いから、一体的な事業展開が難しかったため、石川町の5商店街の会長等が中心となり「横浜まちクリエイティブ」を設立。地域課題を解決しながら、収益を生み出し、その利益をさらに地域へ還元する仕組みづくりを進めた。

・横浜まちクリエイティブの主な取り組み

① マーケットテラスカフェ（コミュニティ拠点）

商店街・町内会の会議場所、イベント運営拠点、商品券事業の窓口など、多目的に活用できる。イベント時だけではなく、日常的に地域の人が交流できる場所を形成した。

② 空き家を活用したゲストハウス

築50年以上の空き家を改修し、宿泊施設として収益を確保するとともに、宿泊者を地域店舗へ誘導する。あえて素泊まりにして食事は地元飲食店を紹介し、地域内消費につなげる。地元アーティストによる内装・作品展示利用を可能とし、地域文化を体験できる仕組みをつくった。

③ その他のスモールビジネス

上記ゲストハウス運営から派生し、必要な機能を地域内で事業化した。

例：コインランドリー事業・グッズ制作・シェアキッチン・シェアオフィスなど、それぞれ単独では大きな利益を生まなくても、複数事業を組み合わせることで地域全体の価値向上につなげている。

(4) 持続可能なまちづくりに向けた考え方

・イベントの役割は「集客」だけではない

イベントは単なる一時的な催事ではなく、地域の潜在的な担い手を発見する場となる。地元アーティスト、学校、町内会、事業者など、多様な主体が関わることで地域のつながりが可視化される。「こんな人材や魅力がある」という地域自身の誇り（シビックプライド）につながる。

・「やりたい人が挑戦できるまち」

石川町では、最初に完成形のまちづくり計画やブランドを決めるのではなく、「地域で何かやりたい人」を見つけて、「挑戦できる環境」をつくり、「結果としてまちの魅力が形成される」という考え方で取組を進めている。

裏フェス開催から始まり、まずは小さな挑戦「やりたいこと」を認め、それを一つ一つかたちにしていって、10年かけてまちづくりが進んでいった。

やりたいことを挑戦できる環境をつくり、計画する人より「やりたい人」を増やすことが大切である。

7 感想・自由意見（抜粋）

- ・ 現在進行形で実践されている飯田先生の行動、考え方に触れられて本当に貴重な時間いただきました。上手くいった話だけでなく実際におこる問題との向き合いも誠実に話してくれる姿が印象的でした。
- ・ 人とのつながりによって町が元気になっていく話を聞いて、秦野もこれから活気のある街づくりができると思いました。
- ・ 実践した方でしか気づかない真理に満ちたエピソードが豊富で大変勉強になりました。
- ・ やりたいと思っていることを行動にできること、環境をつくることは素晴らしいと思いました。